

『弁慶物語』諸本についての一考察

——刊本類を中心に——

田代圭一

一 はじめに

室町時代には「お伽草子」「中世小説」「室町物語」などと称される多くの物語群が誕生し⁽¹⁾、その数は今日までにおよそ四二〇種ほどが数えられる。さまざまな作品に多数の主人公が登場するが、特に頻出する登場人物の一人として武蔵坊弁慶が挙げられる。弁慶を主人公とするお伽草子作品はここで取り上げる「弁慶物語」の他にも「自剃弁慶」「橋弁慶」等があるが、伝本の多さでは「弁慶物語」が群を抜いている。その内容は、弁慶の誕生から源義経との対戦、そして主従関係を結び、奥州に下って行くまでの物語である。かつては弁慶の実在そのものを疑問視する意見もあったが⁽²⁾、「吾妻鏡」文治元年（一一八三）十一月三日、同六日条に、義経の家来としてその名が見え、現在では実在した人物として位置づけられている。室町時代前期に成立したと見られる「義経記」巻三も弁慶を主人公とし、義経との主従関係を結ぶに至るまでの話が綴られており、大部分が「弁慶物語」と同内容である。

作品としての「弁慶物語」に関する最古の史料は「看聞日記」永享六年（一三四四）十一月六日条である。ここには「内裏物語御用之由被仰下之間、史

漢物語六卷、武蔵坊弁慶物語二巻献之、」とあり、貞成親王が「弁慶物語」を後花園天皇に献上した旨が見られる。また、天理図書館蔵「後花園天皇宸翰」は献上を受けての礼状であると考えられる⁽³⁾。その他、「看聞日記」永享九年（一三四三）七月一九日条には「清水代官参、内裏灯炉二申出拝見、（中略）一清水風情、牛若弁慶切合風情也、殊勝一段驚目了、」とあり、義経と弁慶が対決したという話は室町前期には既に広まっていたと考えられる。

諸本については、戦後間もなくまでに刊本類諸本の主要なものは紹介され、写本については藤井隆氏が穂久邇文庫蔵絵巻を紹介して以来、諸本が翻刻・紹介されてきた。これまでの研究によると、刊本類はそれぞれの本文に大きな異同は見られないというものの、相互の関係がはっきり定まっているとは言いがたく、広く古活字本、整版本も含めて整理する必要があると思われる。諸本の特徴を明らかにし、結果として刊本類の善本を定めることにより、写本も含めた「弁慶物語」諸本を考察していくにあたっての手がかりとしたと思う。本稿では、まずその基礎的な考察として刊本類について検討してみたい。

『弁慶物語』諸本一覧

【刊本】						
番号	書名	頁数	刊行年代	形状	所蔵者(機関)名	備考(翻刻など)
①	弁慶物語	二冊(上下)	慶長頃	古活字	大東急記念文庫	大東急記念文庫善本叢刊近世篇一「仮名草子集」(汲古書院、昭和五十一年、解説中村幸彦氏)影印
②	弁慶物語	一冊(上下)	慶長元和頃	古活字	東京大学国文学研究室、下のみ龍門文庫	大友信一氏、木村昌氏「弁慶物語」(桜楓社、昭和六十一年)翻刻 東京大学国文学研究室蔵本は有補写、平出鏗二郎氏「室町時代小説集」(精華書院、明治四十年)翻刻
③	弁慶物語	二冊(上下)	元和寛永頃	古活字	慶応義塾大学図書館	横山重氏、松本隆信氏「室町時物語大成」一二(角川書店、昭和五十九年)翻刻
④	べんけいざうし	二冊(上下)	元和寛永頃	古活字	島根県某家	下房俊一氏「島根大学文学部紀要」一〇・一一(島根大学文学部、昭和五十一年二月、五年二月)翻刻
⑤	弁慶物語	二冊(上下)	慶安四年	版	国立国会図書館、東北大学図書館(※) 東京大学蔵亨文庫(※) 京都大学国文学研究室(※)	横山重氏「室町時代小説集」(昭南書房、昭和十八年)翻刻
⑥	弁慶物語	二冊(上下)	貞享二年	版	国立国会図書館、彰考館	河内屋理兵衛刊
⑦	弁慶物語	一冊(上のみ)	江戸初期カ	版	早稲田大学図書館	零本(巻頭巻末欠)

【写本】						
一	武蔵坊弁慶物語絵巻（仮題）	一巻	室町後期	絵巻	惣久通文庫	藤井隆氏「未刊御伽草子集と研究 二」（未刊国文資料刊行会、昭和三年）翻刻
二	弁慶物語	二冊（上中）	室町末・江戸初	写	東京大学国文学研究室	下欠
三	武蔵坊絵縁起	三巻（上中下）	室町末期	写	チェスター・ビブリー図書館	「在外奈良絵本」（奈良絵本国際研究会編 角川書店、昭和五十六年、担当徳江元正氏）影印、 新日本古典文学大系五五「室町物語集 下」（岩波書店、平成四年、担当徳田和夫氏）翻刻
四	弁慶物語	一冊（上下）	元和七年	写	国立国会図書館	「室町時代物語大成 一二」翻刻
五	弁慶物語	二冊（上下）	元和寛永頃	写	天理図書館	国籍類書本、「山邊道 二八」（天理大学国文学会、昭和五十九年三月）翻刻
六	弁慶物語	三冊（上中下）	江戸初期	奈良絵本	天理図書館	
七	弁慶物語	一冊（上下）	江戸初期	写	京都大学国文学研究室	池田敬子氏 京都大学国語国文学資料叢書一四「弁慶物語 京都大学蔵」（臨川書店、昭和五十四年）翻刻
八	弁慶物語	一冊（下のみ）	江戸初期	奈良絵本	京都大学附属図書館	右書に影印収録
九	へんけい物かたり	二冊（上下）	江戸初期	写	岩瀬文庫	
一〇	弁慶物語	一冊	寛永二〇年	写	東京大学国文学研究室	日本古典影印叢刊二七「室町物語集」（日本古典文学会、平成二年、担当市古貞次氏）影印
一一	弁慶物語	二冊	江戸期		山口大学附属図書館	徳山毛利家旧蔵
一二	弁慶物語	一巻	江戸初期	絵巻	東洋文庫	残欠、詞欠
一三	弁慶物語	三冊（上中下）	江戸初期カ	奈良絵本	井田等氏	
一四	弁慶物語	二冊	江戸期	奈良絵本	大英図書館	
一五	（書名未確認）	一巻	江戸期	絵巻	フオグ美術館	

(注) (※) を付した三本はいずれも慶安四年整版本の無刊記後印本である。

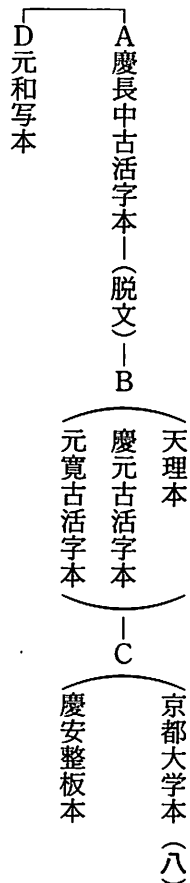
この表は平成一三年一〇月現在の調査結果である。他にも新出本や所蔵者の変更、または遺漏、誤謬などがあるかもしれない。ご教示いただければ幸いである。

二 諸本と先行研究

筆者が調査した『弁慶物語』の主要な伝本はこれまでのところ前頁の通りである。この表は、松本隆信氏「増室町時代物語類簡明目録」⁽⁴⁾に、筆者による増補を加えたものである。なお、便宜上、人名表記は「弁慶」に統一した。まずはじめに刊本類に関する従来の研究の軌跡について紹介しておきたい。刊本類については、明治四一年刊行の平出鏗二郎氏の『室町時代小説集』において慶長元和古活字本（前掲一覽表の②）を底本として翻刻したことに始まる。続く明治四二年刊行の平出氏の『近古小説解題』の中で慶長元和古活字本と寛永四年整版本、貞享二年整版本の存在（②⑤⑥）を紹介している。その後、横山重氏は『室町時代小説集』（昭南書房、昭和一八年）で慶安四年本を翻刻し、慶長元和頃古活字本を対校本として傍記し、両者の相違があまり多くないと述べている。その他、早稲田大学図書館蔵丹緑本（⑦）と貞享二年整版本の存在を紹介しているが、共に後述する。川瀬一馬氏は『増古活字版之研究』（共立社、昭和四二年）で慶長頃古活字本（①）と慶長元和頃古活字本（②）、元和寛永頃古活字本（③）について言及している。川瀬氏は、①が②・③に先行すると思われるとし、また、③は②に拠って翻印したものであると推定し、②・③を「其の本文全く同一なり」（五九五頁）と述べている。また、昭和五一年には刊本の中で最古とされる大東急記念文庫蔵慶長頃古活字本（①）が影印で出版された。解説の中で中村幸彦氏は「（慶長頃古活字本と）慶元（慶長元和）中活字版とはほとんど相違はない」とし、「『弁慶物語』の刊本の本文は、異本間にも変化の少ない」（前掲「仮

名草子集」解説三頁）と述べている。

刊本類の分類に大きく寄与したと思われるのが、昭和五一・五二年に翻刻紹介された『べんけいざうし』⁽⁴⁾に絡む下房俊一氏の諸本の考察である。同氏は「島根大学文学部紀要 一〇・一一」において「べんけいざうし」を翻刻し、「古活字本『べんけいざうし』について」（『島大國文 六』昭和五二年三月）で写本類諸本も含めた諸本の分類を行った。これは刊本類では①⑤を、写本類も四・六・八を視野に入れた幅広い考察となっている。この中で下房氏は「慶元中古活字本および慶安整板本は、ともに、弁慶自戒の条に大幅な脱文があるが、慶長中古活字本はこの部分を存している」とのことで、「ここに一線を引くことになる」（いずれも「島大國文 六」四八頁）と述べている。この脱文については天理本（六）もまったく同じとのことであり、天理本は慶長元和頃古活字本と同一の本文であるとしている。脱文についての指摘は下房氏によって初めて公にされ、このことは刊本系統の分類を大きく前進させた。下房氏は以上を要約し、写本も含めた系統図を以下のようにまとめている。なお、元和寛永頃古活字本については、川瀬氏の指摘した慶長元和頃古活字本との同文の由を踏まえている。



さらに下房氏は「べんけいざうし」に見られる異本性をも指摘しているが、詳細については後述する。

また、写本であるが昭和五四年に池田敬子氏によって京都大学国文学研究

室蔵本（七）が翻刻紹介された。解説中で池田氏は刊本類と写本類諸本の本文を項目ごとに細かく対照し、詳細な考察を加えている。本稿も随所で触れるように、池田氏の成果に負うところも大きい。

今西實氏は「山邊道 二八」においてこれらを踏まえ、「刊本系列の伝本には、慶安以降の整版本や、数種の奈良絵本・写本類も含めた、慶長古活字本の系列―流布本―の諸本の他に、別に元和寛永古活字本（べんけいざうし）―異本―がある」（前掲「山邊道」九三頁）とまとめている。

昭和五九年に刊行された『室町時代物語大成 一二』では、慶応義塾大学図書館蔵元和寛永頃古活字本を底本とし、慶長頃古活字本の校異が傍記されているが、大きな差異は見られない。昭和六一年には慶長頃古活字本の翻刻を見て、刊本類諸本は一通り世に出る形となった。写本では東京大学国文学研究室蔵寛永二〇年写本（一〇）は、平成二年に影印で出版されたが、こちらにも後に取り上げる。

こうした先行研究をまとめると、慶長頃古活字本を最古本とした上で、慶長元和頃古活字本（以下、慶元古活字本と表記する）と元和寛永頃古活字本（以下、元寛古活字本と表記する）への流れをたどることの妥当性や、脱文の示唆するところ、さらに慶安四年整版本以下の版本の流れを明らかにしていくことなどが刊本類諸本分類の解明につながると言えよう。本稿はこうした点を中心に論を進めていくこととする。

三 古活字本について

〈1〉脱文について

古活字本の考察を行うにあたり、まずは大きな違いとされる脱文について検討していきたい。その脱文とは、弁慶が自剃りをして出家した後、父と師匠の名を取って「弁慶」と自ら命名し、五つの戒（殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒）を唱える場面であるが、そこが大幅に（飲酒戒の途中まで）欠脱していることを指す。この脱落の有無は刊本類諸本の分類にあたり、重要な目安の一つとなろう。慶長頃古活字本の本文を以下に記す。（括弧内が慶安四年整版本などで脱落している部分である。また、空格は私に施した）

わふそんさしもへたゝらす うちも方なきもの（そかし くきやうはうとやつくへき てんしやうはうとやつくへき それもありことあたらし さいたうのむさしはういはるへし 父のへん心のへんの字をとりししやうの慶心のけいのちをとり 弁慶とつくへし さいたうの武蔵はう弁慶と三度よひ 三度こたへて さらは仏の御まへにてかいをたまたん 扱五かいとはせつしやう ちうたう しやゐん まふこ おんしゆこの五かい よくくたもつやいなやといひて われとこたへて まつせつしやうかいは 物のいのちをころさぬ事か 何といふとも へんけいにあたをなし にくき物をはころさてはかなふまし 此かいをは御ほとけゆるし給へ ちうたうかいと申は ぬすみせぬ事か へんけいほと物の物かいかてかぬすみをはすへき 此かいはたもつなり しやゐんかい

は 女人にちかつかぬこさんなれ 当山のしゆとゝして いかてか此か
いをはおかすへし 是をもたまち申なり まふこかいの事は 人をころ
さむばかりことには まふこせすはかなふまし 此かいをはたもつまし
おんしゆかひの事は くわむねん くはんほうをいたさむ時 きやうと
うの心おこらんや 弁慶においておむ⁵ しゆする事あるへからす

下房氏は、この脱落をもとにした分類を、先に挙げた図のように示している。
また、池田敬子氏は前掲書解説で「この条（弁慶自戒の条）を大幅に脱落さ
せた慶・元古活字本、整版本はまったくこの関わりを見落としたのだと言え
よう。が、慶・元古活字本はこの脱落以外は慶長古活字本とほぼ一致して古
活字本の二段構造を示し、整版本の直接の祖となっている」（一六六頁）と
述べている。

しかし、ここで指摘すべきは『室町時代物語大成 一二』の翻刻本文に見
られるように、元寛古活字本には脱文該当箇所^①の本文が存在することである。
川瀬氏が述べているように、慶元古活字本と元寛古活字本の本文が全く同一
であれば慶元古活字本にも脱文該当箇所が存在するはずであり、これまでの
先行研究に訂正を加える必要が生じよう。筆者が東京大学国文学研究室蔵慶
元古活字本と慶応義塾大学図書館蔵元寛古活字本をそれぞれ確認したところ、
慶元古活字本には脱文が見られ、元寛古活字本には脱文相当箇所は存在する
ことが確認された。これは従来の先行研究が川瀬氏の述べている、両本を同
一とする報告をそのまま受けて継いでいるが故に見落とされた点と言えよう。
こうした大幅な脱文を生ずるということで、慶元古活字本の本文は慶長頃古
活字本、元寛古活字本の下位に位置することになる。

ところで、この脱文は下房氏も指摘しているように慶長頃古活字本の九丁

表裏の全一枚に相当する。池田氏が「脱落させた」とか「関わりを見落とす
た」と述べているような人為的な要因よりも、ここは単純なミスによるもの
と見なすのが妥当であろう。「うちも方なきもの／しゆする事あるへからす」
では人為的な欠脱とするには不自然でもある。また、既に本稿で紹介した古
活字本に関わる川瀬氏と中村氏の報告にも修正が必要とされよう。

〈2〉元寛古活字本について

前項で弁慶自戒の条をめぐる脱文の有無について検討し、慶元古活字本に
脱文が見られ、同一とされてきた元寛古活字本と本文に違いが見られること
を確認した。よって本文的には慶長頃古活字本と元寛古活字本の善本性、あ
るいは現存する古活字本内においての祖本的な地位に位置する可能性が、両
本に残されていることになる。

続いて本稿末尾の対校表1を用い、元寛古活字本を主としつつ、その二本
を考察していくが、異同を明確に示すために問題箇所を部分的に比較した簡
単な対校表も以下に記す。①は慶長頃古活字本、②が慶元古活字本、③が元
寛古活字本である。

① 六十あまりのらうそう	あしかりなんと思ひ	けむし給ふなれ
② 六十あまりのらうそう	あしかりなんとおもひ	けんし給ふなれ
③ 六十あまりのらう僧	あしかりなん思	けんじまふなれ
① むねちか(人名)は	しやうそくして	あふきをひらき
② むねちかは	しやうそくして	あふきをひらき
③ むねちかは	しやそくして	あふきをひら

① おほしき もの	か ふとくくを ^レ したゝ かに	よろこひ給 ひ
② おほしき もの	か ふとくくを ^レ したゝ かに	よろこひ給 ひ
③ おほしき もの	かかふとくくを ^レ したゝ たかに	よつこひたまひて
① さふらひと も	ひろうにて	しのひく ^レ に
② さふらひと も	ひろうにて	しのひく ^レ に
③ さふら 共	ひろうにて	しのひく ^レ に
① いかに と	入道の方 へ	
② いかに と	入道の方 へ	
③ いかにに と	入道のかたへ	

慶長頃古活字本と慶元古活字本には誤植が数カ所にとどまるに對し、元寛古活字本には傍線を付したようにやや多い。衍字、活字の入れ違え、または活字の入れ忘れなどである。慶長頃古活字本の本文に比べ、元寛古活字本が若干劣る感は否めない。

また、対校表1からは古活字本本文は脱文を除く箇所での慶長頃古活字本と慶元古活字本の本文的近似性が確認されるものの、對する元寛古活字本の異同の多さが目立つ。大幅な脱文を有する慶元古活字本をもとに元寛古活字本が翻印されたとは考えにくく、慶長頃古活字本との書承関係を想定すべきであろう。また、異同の目立つ元寛古活字本本文をもとに慶元古活字本が成ったとも考えにくく、やはりこちらも慶長頃古活字本に拠っていると見なすべきである。次も慶長頃古活字本→慶元古活字本の流れを示す一例である。

① 心 思 ふかくそめて	くたんこくはしや殿	かやし給 はれ
② 心 思 ふかくそめて	くたむこくはしや殿	かやし給 はれ
③ こころをもふかくそめて	くたんこくわしやとの	返し たまはれ

また、対校表1の他の箇所に目を向けても、元寛古活字本についての独自

性は際立っている。イやサは数字の違いという形で、また、オ、カ、シ、セ、タ、テなどもよりはつきりとした形で元寛頃古活字本の異文性を示している。ケやニは意味は通るものの、前文の文末が重なって翻印されたようでもある。チについては弁慶が居眠り中、顔に落書され、他の児や法師に笑われる場面であるが、ここは諸本に共通して直前に「水かゝみをみれば」⁽⁶⁾とあるのを元寛古活字本が承けていると思われる。つまり、自分の顔の落書に気づいた弁慶が、水面に映った自分の顔を見て苦笑しているわけであり、そんな光景も目に浮かんでくるかのようである。あるいは単に活字「ら」の入れ忘れによるとも考えられるが、もしそうであるならば「みつか⁽⁷⁾かゝみ」と傍線部のようになると思われ、他本のあり方に近づく。しかし、他本の「みつからかゝみにむかひて」⁽⁷⁾では、自分の顔に不審を抱いて蓮池の端に行った弁慶が、水鏡を見ればよいのに、改めて鏡を見るという構図になり、一見、理解に苦しむ表現にも見て取れる。ここは場面的にも元寛古活字本の本文に分があるように思える。

しかし、本文の善本性とは別に、慶長頃古活字本と元寛古活字本との先後関係を確定することについては慎重を期さなければならない。もちろんこれまでの研究成果は書誌学的観点からの考察がなされたものではあるが、本文的には元寛古活字本も対校表1のイ、ウ、オ、カに見られるように、現存最古とされる穂久邇文庫蔵絵巻（後述）との関係を否定し去ることができず、元寛古活字本にはこうした古態性を持つことを指摘しておきたい。穂久邇文庫蔵絵巻の考察に併せ、元寛古活字本や慶長頃古活字本との関係等についての説明も求められるが、それは今後の課題としたい。⁽⁸⁾

以上のことから、古活字本の分類では、慶長頃古活字本が本文的にも善本

性が高く、多くの刊本もその本文を承けていることは明らかであろう。その慶長頃古活字本をもとに元寛古活字本が、そして一丁分の見落としにより、慶元古活字本がそれぞれ成立したと考えられよう。慶長頃古活字本文と、対する異文の多さが見られる元寛古活字本文の相違点は、以下、版本類諸本がどの本文に拠っているかの見極めをなす上で重要な要素となろう。

また、かつて下房氏が紹介された古活字本の一つでもある島根県某家蔵

『べんけいざうし』はこれまでの研究で刊本類の中でも異本に位置するとされてきた。本稿で扱ってきた諸本の異同に比べ、さらに大幅な違いが見られるということである。下房氏は以下の項目について諸本を引用し、独自性を指摘している。詳細についてはそちらに譲るが、2を除き大筋で物語の構成に変動をきたすものではない。その項目は、

1. 弁慶、渡辺行治の財を奪う条
2. 弁慶、渡辺行治を強盗の難から救う条
3. 書写山炎上の条
4. 慶心（弁慶の師匠）六原へ連行される条
5. 吉内左衛門計略の条
6. 六条河原の条

であり、これまで触れてきた諸本に比べても大幅な異文となっている。

その『べんけいざうし』の特質を象徴的に示している箇所は右の項目2（対校表4のア）である。ここは他本の行治の無抵抗ぶり、あるいは怯えぶりに比べ、大いに奮戦している姿が印象的である（古活字本は傍線部に見られるように、抵抗しているのは行治の郎等である）。アの最後の方には、傍線部に見られるように、行治の館を「城」とまで表現している。『べんけい

ざうし』は古活字本系統の本文にありながら、中でも行治の奮戦ぶりを描き、彼に好意的な筆致が見られることを指摘しておかなければならない。

行治の活躍が印象的である『べんけいざうし』であるが、池田敬子氏は弁慶自戒の条に共通して見られる誤りをもとに慶長頃古活字本との関わりを想定している。また、下房俊一氏は諸本の成立として祖本からの流れを

べんけいざうし

弁慶物語↓武蔵坊弁慶物語絵巻

のように考えることの可能性を提起している。しかしながら、対校作業を進めたところ、『べんけいざうし』の本文が大筋で元寛頃古活字本と一致することが判明したのである。先に慶長頃古活字本に対しての異文の多さを指摘した元寛古活字本であるが、その異文とされる箇所が見事に一致しているのである。対校表1と『べんけいざうし』の比較の結果は次の通りである、

・一致箇所↓ア、ウ、オ、コ、サ、セ、ソ、タ、ツ、テ、ト、ナ、ニ、ネ、ノ、ハ、フ、ヘ

・一致していると思われる箇所↓ク（「番衆」と漢字になっており、「はんしゅ」「はんしゆう」とどちらにも取ることができる）、チ（「みつからみ」となっており、「みつかゝみ」の読み違いかとも思われる）

刊本類全体の中でも独自性を見せた対校表1の元寛古活字本文該当箇所との一致を、これだけ多く見出せることは、両者の関わりを十分に想定させるに足るものである。細かい箇所の一致も含め、特にサのような数字を伴う部分、テのように比較的長きにわたる部分も共通し、ネのような齟齬の一致、ケやニに見られる前文文末を繰り返したとも思われる部分に至るまで共通した本文を持つことは、両者のつながりを何よりも雄弁に物語っている。

『べんけいざうし』は元寛古活字本を基にしていると思われ、よってここに刊本類諸本は一通り系統立てることができたわけである。

四 整版本について

〈1〉整版本全般

次に整版本を考察する。整版本の特性を探り、それぞれがどの本に拠っているかを探ることとしたい。そこでまず、整版本全般について述べた後、個々の本について触れる。

先に触れた脱文については、慶安四年整版本、早稲田大学図書館蔵丹緑本、貞享二年整版本共に認められ、整版本は一括した分類が可能なのである。いずれも本文に大きな乱れが生じているということで、本文の善本性は自ずから劣ってしまう。脱文以外の箇所についての検討は対校表2を用いるが、古活字本については該当箇所の諸本間の差異がほとんどないことを確認し、慶長頃古活字本を校本として用いた。

対校表2は古活字本文と整版本本文との主たる違いである。細かい箇所に至るまで古活字本と整版本とに分けられ、整版本として共通した本文を持っている。脱文のみならず、こうした共通本文もまた、刊本類諸本を古活字本と整版本とに区別する手掛かりとなり、同時に整版本が各本別個に古活字本に拠って成立しているのではなく、整版本相互のつながりの強さを想定させるものとなる。

その整版本であるが、誤植や文意が通りにくくなっている箇所も若干あるものの、横山重氏が『室町時代物語集』で「割合に、丁寧に、複製してあ

る」(四八七頁)と述べているように、本文の改変にも文意を考慮した配慮が施されていると思われる箇所も少なからず見られる。キは古活字本に見られる「とく人」「ふんけんの物」が「ちやうしや(長者)」に、ツは「さんくわい(参会)申」が「まいりあひ」に変わっている。読みやすく、平易な文体に改めたとも言えようか。また、セはより会話的文体が変わっており、ナに関しては整版本の方が文意が通ると思われる。以下もその一例である。

慶長	くはんをん参りのしゆ	上下せむ	此道	をさしふさぎ
慶安	観音	参りの上下の衆	此道	をさしふさぎ
貞享	くはんをん参りの上下の衆		此みちをさしふさぎ	

さらにフ・ホでは適切な敬語も付されていることなど、整版本本文も文意を考えて翻印されていると見られる。もちろん、すべてに当てはまるわけではないが、翻印にあたってのこうした比較的丁寧な姿勢は評価されよう。

その整版本と古活字本との関係であるが、結論を先に述べると、整版本本文は慶長頃古活字本系本文の流れを引いているということである。再び対校表1を参照すると、イヤサ、異同が顕著なシ、セ、チ、テなどからは慶長頃古活字本文との一致は数多く見出す一方、元寛古活字本とのつながりは逆に伺うことはできない。つまり元寛古活字本→整版本への流れを想定することは極めて困難であり、整版本は、慶長頃古活字本系の本文からなることは確かなものとなる。

〈2〉国立国会図書館蔵慶安四年整版本と早稲田大学図書館蔵丹緑本

前項で整版本全般に関わる特徴を示してきたが、次に個々の本に焦点を当て、まずは国立国会図書館蔵慶安四年整版本(以下、慶安四年本と表記)と

早稲田大学図書館蔵丹緑本（以下、早大丹緑本と表記）を中心に考察する。どちらの本文がより古態であるかを探ると共に、刊本類諸本内での位置付けを目的としたい。対校表は3を用いる。

早大丹緑本は従来、あまり触れられておらず、横山重氏が「因に、弁慶物語の丹緑本の零本が早大図書館にある。慶安板の後印本に丹緑をさしたのであらう。」（『室町時代小説集』四八八頁）と述べているのが目に付く程度である。上巻のみの零本で、そのうち、冒頭が数丁（うち絵一図も含む）、巻末が一丁ほど欠けている。表紙題簽角書に「元禄板」、右肩に「元禄板行」と墨書されているが、表紙自体が明治七年に作られた旨が見返しに記されており、この題簽は信頼に欠けるものであろうか。これまでにあまり大きく扱われることのなかったことや、一見したところ、慶安四年本の挿絵とほとんど同じ図柄であることも含め、筆者としても当初はやはり慶安四年本の後出本かと思われた。

しかし、対校作業を進めていくと、早大丹緑本の方が慶安四年本に先行するのではないかと推測させる要素が浮かび上がり、対校表3はそうした根拠となり得る箇所を列挙したものである。この表からは版本系本文を持つ三本の中でも古活字本系と早大丹緑本の本文の一致度の高さが認められよう。特にイ、カ、ク、ケ、ス、セ、ソはそれが顕著である他、細かい箇所においても古活字本系と早大丹緑本の一致が確認される。これは早大丹緑本の、慶安四年本に対する先行性を示していると思われる。また、既に指摘したことでもあるが、カヤスは版本にあつて、平易で具体的な表現に変わっている。

こうして対校表2や3に示されるように、早大丹緑本は版本類に共通の本文を持つ一方、古活字本系の本文をも併せ持っていることが明らかとなった。

慶安四年以下の版本には見られない古活字本文を早大丹緑本が持っていることから、版本類の中でも古態を残し、古活字本から整版本に本文が移行するの上での過渡期的な本文としても位置付けられようか。

〈3〉古活字本と早稲田大学図書館蔵丹緑本との関係

早大丹緑本が慶安四年本に先行する可能性が大で、かつ、古活字本との交渉が想定される以上、次の課題は早大丹緑本がどの古活字本と関わりを持っていたか、ひいてはどの本に拠っているかを追求することであるが、既に述べたように、整版本は慶長頃古活字本系本文との関わりが想定されている。この時点で元寛古活字本との交渉は否定されることになる。そこで慶長頃古活字本と慶元古活字本とに絞って対校作業を続けたところ、おそらく慶元古活字本をもとにしているであろうという結論にたどり着いたのである。先の一丁分の脱落の他に重複を厭わず引用すると、まずは対校表1のイである。

慶長	刀	は九すん	五ふん	同	しく一しやく八すんのうちかたな
慶元		かたなは三しやく九寸		おなしく一しやく八寸	のうちかたな
早大		かたなは三尺	九寸	おなしく一尺	八寸のうちかたな

刀の長さが慶長頃活字本と早大丹緑本で三尺九寸と一致している。版本系諸本はこの三尺九寸を承けており、数字を示すこの箇所での一致は、慶元古活字本と早大丹緑本との関係を伺わせるものとなる。また、

慶長	いよ／＼しゆかくの思ひに心をそめ	ふつしんほふ見をおこなひ給ひ候てこそ
慶元	いよ／＼しゆかくの思ひに心をそめ	
早大	いよ／＼しゆかくの思ひに心をそめ	

（次頁へ続く）

慶長 かれこれさうをうして めてたかるへきに
 慶元 これさうをうして めてたかるへきに
 早大 これさうおうして めてたかるへきに

では、慶元古活字本、早大丹緑本は慶長頃古活字本に見られる「ふつしん・・・」以下が一部欠脱している。この欠脱は不自然な形であり、おそらく親本の欠脱をそのまま本文に取り入れたために生じた一致であろう。こうした箇所も慶元古活字本と早大丹緑本のつながりを伺わせる。さらには

慶長 さうのこて おなしくすねあて	いつのまにかは取 合せ
慶元 さうのこて すねあて	いつのまにかは取 合
早大 さうのこて すねあて	いつのまにかはとり合 (慶安「とりあひ」)

なども慶元和古活字本に拠っていることの証左になろう

このように、早大丹緑本は慶元古活字本の本文に拠っている可能性が高いことを示してきた。これは慶元古活字本が整版本の直接の祖となっているとする池田氏の説を改めて裏付けることにもなろう。慶安四年本はおそらくその早大丹緑本を承けて成立したものと思われる。

《4》貞享二年整版本と挿絵について

これまでも版本系諸本の一として触れている国立国会図書館蔵貞享二年整版本（以下、貞享二年本と表記する）であるが、改めてその位置付けを試みたい。

貞享二年本は先行研究や対校表2、3にも見られるように、整版本本文の系統を持ち、その本文は慶安四年本のそれに拠つていえると言える。ただ、貞享二年本は数カ所に目移りと思われる一行程度の欠脱が認められ、本文的にはさらに劣る。また、早大丹緑本、慶安四年本が半丁一二行に対して一五行

図版 2



第二図・国立国会図書館蔵慶安四年整版本

図版 1



早稲田大学図書館蔵丹緑本

図版3 国立国会図書館蔵貞享二〇年整版本



(輿に供する二人の男の向きが異なる)

となつてゐる他、漢字がやや多く使われていることが特徴的である。

挿絵については、早大丹緑本、慶安四年本、貞享二年本それぞれ同様の構図が用いられ、版本系としての流れを有していると見なせよう。ただし、細部に若干の違いは見られ、必ずしも忠実な複製とは言えない。早大丹緑本には慶安四年本、貞享二年本の上巻第五〜六図の間に渡辺玄蕃允行春の館で暴れる場面の挿絵、同じく第七〜八図の間に蹴鞠をしている法師をからかう挿絵があり、これらは両本には見られない。また、貞享二年本には慶安四年本の七〜八図の間に位置する、顔に落書された弁慶が笑われる挿絵があり、これは早大丹緑本にも慶安四年本にも見られない独自のものである。その他、下巻一二丁裏(慶安四年本の下巻第四図)の挿絵が裏返しに印刷されている

ことなどが目に留まる。各本の図柄を比べると、早大丹緑本と慶安四年本は近い関係にあることが認められ、慶安四年本と貞享二年本も似た要素は持っている。早大丹緑本と貞享二年本のみに重なる特徴は見られず、寛永→貞享と時代が下るにつれて構図の違いも目立つように見受けられる。挿絵からも早大丹緑本→慶安四年本→貞享二年本という流れが補えよう(図版1〜3参照)。

以上、刊本類諸本の主要な伝本を考察してきた。簡潔にまとめると、慶長古活字本が現存する刊本の中では最善本と位置付けられ、慶元古活字本は慶長頃古活字本に、「べんけいざうし」は元寛古活字本に拠っている。また、慶元古活字本は慶長頃古活字本の九丁全体を欠き、脱文となつて本文に乱れが生じている。その脱文を持った慶元古活字本をもとに、早大丹緑本が成立したと思われ、以下、早大丹緑本→慶安四年本→貞享二年本という整版本の流れが推測されるのである。

五 写本と刊本との関係について

穂久邇文庫に所蔵される絵巻『武蔵坊弁慶物語絵巻』(以下、絵巻と表記する)は藤井隆氏によつて翻刻されており、これを検討すると古活字本諸本との関係を想起させる注目すべき伝本であると考えられる。藤井氏によると、「本絵巻の書写年代は書画風、料紙より見て室町時代の中期を下らないものである」(『未刊御伽草子集 二』二四頁)とされ、『看聞日記』永享六年一月六日条の「武蔵坊弁慶物語二巻」の内容を伝えるものと推定している。つまり現存する伝本の中では最古のものと見なされている。これまでの研究

でも屢々指摘されているように、この絵巻本文は翻刻二四頁のうち、約二〇頁（渡辺館での強盗退治まで）が古活字本と同内容である。対校表1〜3のうち、絵巻に本文が存在する部分は引用したが、大筋で似ていることが確認されよう。例えば対校表3の力なども本文が一致しており、引用箇所以外にもこうした一致箇所が多く存在することから、絵巻本文と古活字本の関わりは何らかの形であったと思われる。しかし、絵巻ではその後の義経との出会いや対決や高館での最期などは大きく簡略化を見せる。特に絵巻では辻斬りをする男が義経になっており、こうした構想は他説話との交渉をも想起させる。他説話との関わりなど、本絵巻についての考察は別稿を用意したいが、古活字本が現存最古とされる絵巻と共通する本文を持つことは、写本類も含めた考察を続ける上で何らかの手掛かりになると思われ、注目に値しよう。

右に言及したように穂久邇文庫蔵絵巻は刊本との関係を想起させるものとして、重要な位置にあるが、その他に刊本系統の本文を持つ写本についても分類を試みたい。手掛かりとしては

・脱文の有無

・対校表1〜3を参照し、典拠本文などを特定して各本の分類を試みる

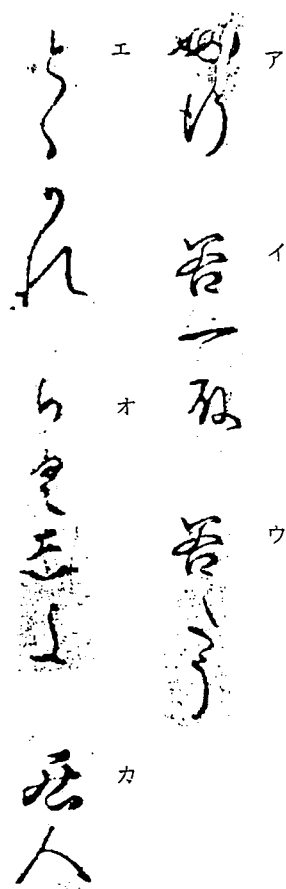
・誤植なども対照し、写本の忠実性を探る

などという点を中心に調査結果をまとめていくことにする。

東京大学国文学研究室蔵寛永二〇年写本（以下、寛永二〇年写本と表記）は、市古貞次氏が解説で「慶長古活字本と酷似しており、祖本は慶長古活字本のそれと同じではないかと思われるものである。あるいは慶長古活字本を写したのかもしれない」（前掲『室町物語集』六四四〜六四五頁）と述べ、慶長頃古活字本との関わりを想定している。確かに慶長頃古活字本本文と酷

似し、慶長頃古活字本そのものを写したと考えられる。若干の語句単位の異同はあり、または誤植部分の訂正はなされているものの、特に、慶長頃古活字本本文の表記を読み間違えたと思われる箇所が寛永二〇年写本には散見されるのである。例えば寛永二〇年写本では「やかてかへりゆき」とあるが、ここは慶長頃古活字本の「やかてふ行（奉行）」の「ふ」の字母である「婦」を読み間違えたためと思われる（図版4のA）。同様に「たに一どの」は「若一殿」を（イ）、「たにたう」は「若たう」を（ウ）、「・・・とくかれたる」は「・・・とと（説）かれたるは」のおどり字の連綿を（エ）、「かくしよ」は「らくしよ」を（オ）、「きよにん」は「蔵人」を（カ）、それぞれ読み違いと推測される。また、「せんひとそ」は慶長頃古活字本の「せん人（善人）そ」を、「にうだうあいくに」は「入道あい国」の読みを仮名表記したものとと思われる。さらには慶長頃古活字本独自の「北の、二しやたんにて」も同様の表記となっている（他本は「二」が見られない）。結果として、寛永二〇年写本は市古氏も述べられているように、慶長頃古活字本そのものを写した可能性が極めて高いと言えよう。

図版4 大東急記念文庫蔵慶長頃古活字本
（大東急記念文庫善本叢刊近世篇一『仮名草子集』より）



井田等氏藏奈良絵本（一三）は三冊構成で、整版本に比べると挿絵も多く、本文はやはり慶長頃古活字本に拠っていると言える。寛永二〇年写本と同様に「かくしよ」の誤写が見られ、「かへりいき」も読み違えたと思われる、「帰行」と表記されている。また、慶長頃古活字本の誤植と思われる「うちかちな」がそのまま書かれていることもその補足となろう。しかし、全般的には慶長頃古活字本がかなり忠実に書写されており、文意不通箇所⁽¹⁾の修正もなされ、顕著な異文は一箇所にとどまっている。

京都大学附属図書館藏奈良絵本（八、以下、京大奈良絵本と表記する）は、下巻のみしか存在しない。本書については池田氏敬子が慶安四年本にほぼ一致する旨を述べているが、ここは少し複雑な様相を呈しているように思える。つまり、京大奈良絵本は慶安四年本との共通本文が多く見られるものの、古活字本系本文を持つ箇所も以下のように少なくないのである。

・古活字本系本文との一致↓対校表2のソ、タ、テ、ト、ニ、ハ、ヘ
・版本系本文との一致↓対校表1のノ、対校表2のチ、ツ、ナ、ネ、ノ、ヒ、フ、ホ

・版本系本文に近い↓対校表2のセ
となっている。このように、古活字本系本文と版本系本文を併せ持つことは、京大奈良絵本が慶安四年本のみ⁽²⁾に拠っているのではないことを示しているよう。また、本書には二二丁裏一行目から二三丁六行目までが錯簡と見られる本をそのまま書写したと思われる、本文に断層を生じているが、本来は二四丁裏の八、九行目の間に入るべき本文である。量的に一丁分の錯簡であろうが、この部分は慶安四年本では丁の中途に位置しており、形態的な面からも慶安四年本を書写したと見なすには無理であろう。

当該本の位置付けを想定するにあたり、想像を逞しくすることが許されるならば、早大丹緑本との関わりが惹起されようか。本稿でも指摘してきたように、早大丹緑本は古活字本系本文と版本系本文双方との関わりが認められる。早大丹緑本が上巻のみ、京大奈良絵本が下巻のみしか存在しないというのが悔やまれるが、これまでの対校結果はその関わりの想定を否定するものではない⁽¹⁰⁾。早大丹緑本との関わりの可能性は、京大奈良絵本の位置付けをなす上で提起しておきたい⁽¹¹⁾。その他には語句単位での異同、欠脱もしばしば見られ、現存する諸本の忠実な書写とは見なしがたい。また、弁慶の師匠の名を「弁心」とするなど、明かな誤りも見られる。

以下は近年発見された伝本であるが、平成七年刊の『明治古典会七夕入札会目録』（明治古典会、平成七年七月）掲載の古活字本『弁慶物語』下巻一冊は、図版を見る限り刊本系本文を有し、活字は慶長古活字本や元寛古活字本のそれと異なる。東京大学国文学研究室蔵の慶元古活字本は当該部分が存在せず、同一のものかどうかは調査に及ばなかった。この件については後の調査を俟ちたい。

続く平成八年の『明治古典会七夕入札会目録』には寛文、延宝頃写の奈良絵本『弁慶物語』五冊が掲載されている。こちらも図版をみる限りでは古活字本系本文を有すると思われる。

『思文閣古書資料目録』第一六九号（思文閣出版、平成二二年九月）掲載の『弁慶物語』五巻もまた慶長古活字本を写したものと見られる。特に下巻巻末部「日百かうちに」が古活字本のままに書かれており、こちらも比較的忠実な書写と言えようか。

六 おわりに

以上、刊本類諸本を中心に、その系統の本文を有する諸本の分類、考察を試みた。結果として刊本類諸本は慶長頃古活字本に集約されるであろうことが確認され、本文的にも同本が善本であると言い得よう。刊本系本文を持つ現存の写本類はほとんどが慶長頃古活字本を書写したものであり、結句、慶長頃古活字本は『弁慶物語』諸本の中でも刊本系統の根幹をなし、主要な一伝本として位置付けられるのである。慶元古活字本は慶長頃古活字本に拠っており、慶元古活字本からは早大丹緑本をはじめとする版本系諸本の流れが想定されること、また、元寛古活字本からはこれまで一異本として位置付けられていた『べんけいざうし』が印行がされた可能性が高いことも指摘した。元寛古活字本も慶長頃古活字本に拠っていると見なせようが、共に現存最古とされる穂久邇文庫絵巻と共通する本文を持ち、古態性を有しているという点で注目値する。また、京大奈良絵本は古活字本系本文と版本系本文を併せ持つということで、早大丹緑本との関わりが推測されることも示してきた。多くの伝本の成立を見た『弁慶物語』は、江戸時代に入っても繰り返し刊行、書写され、人気の高さを反映している。写本類諸本にはまた別系統の話説が展開されており、相互の異同も大きい。弁慶を主人公とした作品は他にもあり、それぞれの調査、整理もまた必要である。弁慶説話の系譜を解明するには今後も説話の多様な広がりを探っていくことが求められようが、本稿がその一助になれば幸いである。文献の雑多な列挙の上に数々の憶測を重ねてきたが、ここに大方の叱正を乞う次第である。

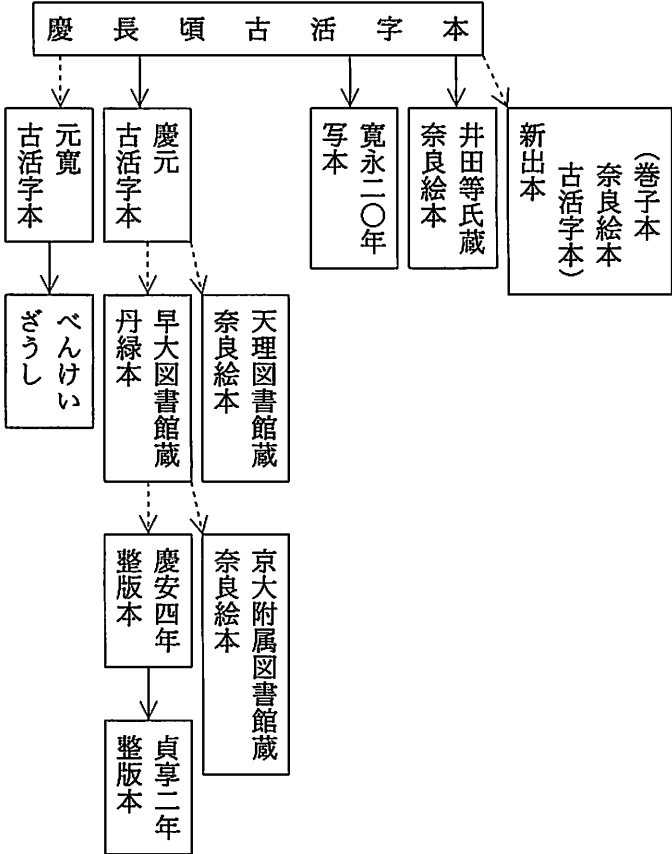
注

- (1) 以後、本稿では便宜的に「お伽草子」の呼称を用いることにする。
- (2) 志田元氏「弁慶伝説小考」(『伝承文学研究 一』昭和三十六年九月) など
- (3) 「天理図書館貴重書展―近三十年の蒐集から―」(平成一三年一月) 図録に収載。
- (4) 『御伽草子の世界』(三省堂、昭和五十七年八月) 所収。
- (5) 本文は太田、木村氏前掲書『弁慶物語』に拠った。
- (6) (5)に同じ
- (7) (5)に同じ
- (8) 徳田和夫氏は前掲『室町物語集 下』解説で、慶長頃古活字本の刊年を元和寛永頃とされている。
- (9) 渡辺行治とは、弁慶が具足類を作らせた職人に作料を与えるのだが、この行治の蔵から数々の品を持ち出している。後日、その財力に目をつけた盗賊一味が行治の館を襲う場面がある。
- (10) また、整版本の祖とされる慶元古活字本本文「むきやうしさいの(他古活字本は「ひきやうしさいの」で「飛行自在」の意)」や「ひききり」という語が同一であることなどもそれを補完しよう。
- (11) 京大奈良絵本は全十図のうち、第四、六図が独自のものである他は全て慶安四年整版本と同じ構図となっている。このことから整版本との関係が確認されよう。

(付記) 本稿をなすにあたり、閲覧や撮影、掲載の許可をいただいた諸機関に厚くお礼申し上げます。

また、本稿二〇頁で紹介した、池田敬子氏の解説は『軍記と室町物語』(清文堂出版、平成一三年)に収録されている。

ものを示している。



(33)

慶長	きつてかゝる	(イ)むさし申やう	(ニ)おほくいころさるゝ	ほとに	(ウ)あなあさましや	(ホ)さるのこくに
慶元	きつてかゝる	武蔵 申やう	おほくいころさるゝ	ほとに	あなあさましや	さるのこくに
元寛	きつ かかる	弁慶 申やう	おほくいころさるゝ	ほとに	あなあさましや	さるのかしらに
早大	きつてかゝる	むさし申やう	おほくいころさるゝ	ほとに	あなあさましや	(ナシ)
慶安	きつてかゝる	むさし申やう	おほくいころさるゝ	ほとに	あなあさましや	さるのこくに
(イ)慶長	したいにも思ふへけれとて	(イ)こしをめ かけてはしりけるに	(イ)こしをめ かけてはしりけるに	(イ)入道殿 入道とのゝ ころひのきりよけに	しろく 見ゆるを	
慶元	したいにも思ふへけれとて	こしをめ かけてはしりけるに	こしをめ かけてはしりけるに	入道とのゝ ころひのきりよけに	しろく 見ゆるを	
元寛	したいにも思ふへけれとて	こしをめ かけてはしりけるに	こしをめ かけてはしりけるに	(ナシ)	入道とのゝ ころひのきりよけに	しろく 見ゆるを
早大	(ナシ)	こしを目 かけてはしりけるに	こしを目 かけてはしりけるに	(ナシ)	入道とのゝ ころひのきりよけに	しろく 見ゆるを
慶安	じたいにもせめ	とて	こしを目 かけてはしりけるに	入道とのゝ ころひのきりよけに	しろく 見ゆるを	
(イ)慶長	やをとゝめて聞ければ	(イ)矢ちかへの法 はならふつ	(イ)矢ちかへの法 はならふつ	(イ)弁慶 は 色 ころくたけたかき法師	打 取 くんこふのそめ	
慶元	やをとゝめて聞ければ	(ナシ)	(ナシ)	へんけいは いろくろくたけたかき法師	そ うちとりくんこうのそめ	
元寛	やをとゝめてきけ	矢 かのほうはならふつ	矢 かのほうはならふつ	(ナシ)	べんけいは いろくろくたけたかきほうし	うちとりくんこうのそめ
早大	(ナシ)	矢ちかへの法 はならふつ	矢ちかへの法 はならふつ			
慶安	矢をとゝめて聞ければ					
対校表2						
(イ)穂	うけ給 はり 候ぞや	(イ)一つ二 ついひいたし	(イ)一つふたつしいたし	(イ)一つ二 つしいたし	(イ)一つ二 つしいたし	(イ)一つ二 つしいたし
慶長	うけ給 はり 候ぞや	一つ二 ついひいたし	一つふたつしいたし	一つ二 つしいたし	一つ二 つしいたし	一つ二 つしいたし
早大	(ナシ)	一つ二 つしいたし	一つふたつしいたし	一つ二 つしいたし	一つ二 つしいたし	一つ二 つしいたし
慶安	承 りて候へば	承はらんとそいひける	承はらむとそいひける	承はらんとそいひける	承はらむとそいひける	承はらんとそいひける
貞享	うけたまわりて候へば	承はらんとそいひける	承はらむとそいひける	承はらんとそいひける	承はらむとそいひける	承はらんとそいひける
(イ)穂	又七条 ほり川に	(イ)人 の所 へゆき	(イ)人 の所 へゆき	(イ)人 の所 へゆき	(イ)人 の所 へゆき	(イ)人 の所 へゆき
慶長	又七条 ほり川に	とく人 のもとへゆき	とく人 のもとへゆき	とく人 のもとへゆき	とく人 のもとへゆき	とく人 のもとへゆき
早大	七条 ほり川に	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行
慶安	七条 ほり川に	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行
貞享	七条 ほり川に	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行	ちやうじやのもとへ行
穂	わたなへの むまのせうとて	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき
慶長	わたなへの けんはのせうとて	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき
早大	わたなへの げんはのせうとて	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき
慶安	わたなへの げんはのせうとて	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき
貞享	わたなへの げんはのせうとて	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき	京 ゐ中にならびなき
対校表2						

穂 慶長 早大 慶安 貞享	くだんのはらまきにさうのこて くだんのはらまき さうのこて くだんのはらまき さうのこて くだんのはらまき さうのこて くだんのはらまき さうのこて	おなじくすねあて おなじくすねあてに すねあて すねあて すねあて	れいのたちかたな 大刀のかたなくし 太刀 かたなきし 太刀 かたなきし 太刀 かたなきし	(ク)いきたる心 もなかりけり いき こゝちはなかりけり いける こゝちぞなかりける いける こゝ地ぞなかりける いける こゝちぞなかりける	(ケ)ほけきやう八くわん 法花 八くはん ほけきやう八くわん ほけきやう八くわん ほけきやう八くわん
(コ)慶長 早大 慶安 貞享	へいせん寺をそ出にけり 弁慶 寺をそ出にけり 弁慶 寺をそ出にけり 弁慶 寺をそ出にけり	(カ)よしやさんへ参り よしや へ参り よしや へ参り よしや へ参り	(シ)申されしは 申されけるは 申されけるは 申されけるは	(ク)大刀をすて かかるを たちをすて かゝりけるを たちをすて かゝりけるを たちをすて かゝりけるを	(セ)あつ きたり太刀かな (以下ナシ) あつばれ きたる太刀かな あつばれ きたる太刀かな
(ク)慶長 早大 慶安 貞享	すきまもなくきつたりけり すきまもなくきつてかゝる すきまもなく切てかゝる	(ケ)おほしめしけるか おほしけるか おほしけるか	(フ)むねうちさため むねうちしづめ むねうちしづめ	(ツ)今一度さんくわい申 今一度まいりあひ 今一度参りあひ	(テ)弁慶此ことを聞えよ 此事を弁慶 聞えよ 此事を弁慶 聞えよ
(コ)慶長 早大 慶安 貞享	まつたくふけふとは思 はぬそ まつたくふけうとはおもわぬなり まつたくふけうとはおもわぬ也	(カ)弁慶か身 石かねにてもあらはこそありのまに申へきに 弁慶か身 石かねにてもあらはこそありのまに申へきに 弁慶が身 石かねにてもあらはこそありのまに申へきに	(ニ)弁慶 かしらを 弁慶 かしらをさしふり 弁慶 かしらをさしふり	(ニ)弁慶 かしらを 弁慶 かしらをさしふり 弁慶 かしらをさしふり	(ニ)弁慶 かしらを 弁慶 かしらをさしふり 弁慶 かしらをさしふり
(ク)慶長 早大 慶安 貞享	下 へなかれよるか しもへながれよらんとて しもへながれよらんとて しもへながれよらんとて	(カ)大 おん あけて 大 おんしやうあけて 大 おんしやうあけて	(ク)まくりしは まくりし風は まくりし風は	(イ)後日にこうくはい すなくと 後日にこうくわいするなくと 後日にこうくわいするなくと	(イ)後日にこうくはい すなくと 後日にこうくわいするなくと 後日にこうくわいするなくと
(ヒ)慶長 早大 慶安 貞享	りつしは山へのほりけり りつしは山へのほり給ふ りつしは山へのほり給ふ りつしは山へのほり給ふ	(フ)よしつねのさいしよをは よしつねの御座 所をは よしつねの御座 所をは	(ヘ)御はうの ためを思ひてこそ 御ばうの御ため 思ひてこそ 御坊の御ため 思ひてこそ	(ホ)もたせ給う は もたせ給ふ御手は もたせ給ふ御手は	(ホ)もたせ給う は もたせ給ふ御手は もたせ給ふ御手は
対校表3	(イ)べんけい ははじめからかうあるべけれとはなしけり もとよりかうこそあるへきとてゆるしけり もとよりかうこそ有 へしとてゆるしけり かうこそあるへしとてゆるしけり かうこそ有 べしとてゆるしけり	弁慶 聞て 弁慶 聞て 弁慶 聞て 弁慶 聞て	むまのせう やうく けんはのせう やうく けんはのせう やうく けんはのせう やうく げんばのせう やうく げんばのせう やうく げんばのせう やうく	かたかげにふるいあて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて	かたかげにふるいあて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて 戸の口 にふるひて

(ウ)穂 慶長 かれうびんがのこゑして 早大 かれうひんのこゑをもつて 慶安 かれうひんのこゑにて 貞享 かれうひんのこゑにて	(エ) けふけする せんちしきの けうけする ぜんちしきの けうけくる ぜんちしきの けうけくる 善 ちしきの	(オ)あらやすの御事候や あら事 ことしう あらことくしう ことくしきやうに ことくしきやうに	(カ)このこそでみなになり候はゞ このこそでみなになり候はゞ この小袖 みなになり候はゞ 此小袖 にてたらずは 此小袖 にてたらずは
(キ)穂 慶長 三人のかぢこがねざいくのところへ 早大 かのさいく 三人 がかたへ 慶安 かのさいくにん三人のかたへ 貞享 かのさいくにん三人の方へ	(ク) あつたらたからを取 のこさんはむねんなり あつたらたから とりのこさんはむねんなり あつたらたから 取 のこさんよりは あつたらたから 取 のこさんよりは	たゞ大舟どもにとりのりて 大せん に取 のりて 大舟 にとりのりて 大せん に取 のりて 大舟 に取 のりて	(ケ) 弁慶 かまへにひさまつき へんけいがまへにひさまつき へんけい前 にかしこまり 弁慶 が前 にかしこまり
(コ)穂 慶長 三十人の 人 ふに 早大 三十人のにんぶに 慶安 三十人のにんぶに 貞享 三十人のにんぶに	(カ)以下ナシ 庭上にはまりをける 庭上にはまりをける (「にわ」と読み仮名つく) 庭 にはまりをける 庭 にはまりをける	(シ) まことは まことは まことに まことに	(ク) あやまちし給 ふなよ あやまちし給 ふなよ けがば したまふなよ けがば したまふなよ
(セ)慶長 早大 うち刀 なにかなふち 慶安 うちがたなかなふち 貞享 刀 はかなふち 刀 かなふち	(イ)大しゆの中へおとり出 大しゆの中へおとり出 大衆 の中へはしり出 大衆 の中へはしり出	(ロ)たうの上 うちあけたり たうの上へうちあけたり たうの上 に あげたり たうの上 に あげたり	
対校表 4 (ツ)慶長 島根 けんはかたちへおしよする 何事そと けんはかたちへをしよする	と おめきさけふあひた おめきさけび入れは ちかきあたりの物 おめきさけび入れは さんへんの下人共も上をおそれて	たつぬれは くはうよりのおほせにて くはうよりのおほせなり くはうよりのおほせなり	大勢いをもつてせむるなり いそき行治か首をもつてまかり出よ いそき行治か首をもつてまかり出よ
慶長 島根 さいひやうの命はたすくへしとて けんはかたちをふたへ三へにとりまはし よせては二百余人たれとも 馬上は一騎もなかりけり	ときをとつとそあげたりけり ていしゆもつてのほかにきやうてんして 行治 おほきにさきき おほきにさきき	一人も出あはす 出あはす 出あはす 出あはす	たちのうちにはわすか五十人にすぎず きもたましゐも身にそはす きもたましゐも身にそはす きもたましゐも身にそはす
慶長 島根 さりなから行はるも かつきやうのようかいなれは あふそとて 大手をうつてたつたりけり	もんをさしかため さふなくせめ入へきやうもなし けんはからうとふ やくらへはしりあかり	かたき大勢にてせめければ 大勢にせめたてられてむねんにおもひ 矢くらへあかり 二人はりに十二そくとつて	矢はねとき さんく にいいたりけり (中略) さるほとにゆきはるは かたき大勢にてせめければ 大勢にせめたてられてむねんにおもひ 矢くらへあかり 二人はりに十二そくとつて

慶長 つかひ 矢さまひろくひかせ きりくし引しめてひやうとはなつ まつさきにすゝみけるかうとうの大將 かたみの次らかむないたにひしとあたり
 島根 矢庭にたふれて死けれとも 少もひるますせめたゝかふ かゝりける所に その時 ゆきはる おなしく女房弁慶かまへにひさまつき 手をあわせ
 慶長 御すけ候ひてたまはれ と申ければ けんはか女房弁慶かまへに行 いか御坊
 島根 一しゆのかげのやりとりもたしやうのゑんと申に あれすけさせたまへかしといふ むさし聞て やすきほとの手 すくて参らせんとて しつくと
 慶長 ものゝくをさしかため くだんの太刀はき うちかたなさすまゝに 大長太刀 かなふち 取くしてもちけるか
 島根 物のく さしかため 大にはへとひをり 三間はかりあるしらかしのまはり一しやくあまりあるやりのゑの あらつくりしたるをとりいたし
 慶長 四方をきつとみわたして申やう ほかたのもの共 たしかにきけもんをひらき そら引して
 島根 二三度ふつてみて あはれよきうちものかな さあらはみかたのもの共 大門こもんをひらかせ かけいつるていにてはくしとひき
 慶長 うちへ ひき入て 其のち もんをさし はしをひきはつせ と下しければ
 島根 かたきを内へをひき入 みなせめいりたる時 堀のはしを引 はつし みかたは弁慶かめてのかたに一所ゐてけんふつせよといふ
 慶長 弁慶か申やうにしたかつてもんをひらき きつていて たたかひければ かたきよろこひて一所になりてせめたゝかふ もとよりてきをひきいれんとの
 島根 下智にまかせて 門をひらけは あんのこくとく一度にとつとせめいるを
 慶長 したくなれば そら引するとはしらすして くつきやうのむしや三百よ人 きつきさをそろへせめいりける すてに大にわさしてみたれいる みかたのせいは
 島根
 慶長 やすみ給へ 此法師かあらきりせんとして 弁慶ゆんてにあひつけ なきなた かなふちをはたてをきて 三けんわたりのなけしのあらつくりしてをきたるを
 島根
 慶長 取のへて すそを一度にさつとはらへは 敵かつに棄てかゝる処を くだんのしらかしにてすそをきらりとなきければ すゝみ出たる兵 よきむしや
 島根 なきなたにあらしい したいにうしろへよりければ たちまち此木にあたりて こしより下をうちおられてはんしはんしやうにしてふしたる物 百七十人にあまれり
 慶長 す十人うたれける 二三度はらひければ 三十余人うたれける 二二三とはらひければ てもとにてしゝたるもの 百余人
 島根 おほもん小門よりおつるものとおほひつめ 三十人うちとゝむる 五町七ちやうにけのひて ふしたる物数をしらす みかたはよきようかいに
 島根 てあしをうちおられ 或はほりへとひ入 みつにおほれてしぬるもあり 城のうちへいりたるもの 一人もいきてかへるはなかりけり
 慶長 たてこもつてたゝかふほとに 手おひもなかりけり
 島根